発達理論の学び舎

Back Number: Vol 181

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2019

目次

3601. ゴッホの手紙と必然性

3602. フランクフルトに降り立つ夢

3603. 知ること・自覚すること

3604. 着実に進行する流れ

3605. 監訳の進捗と音楽を通じた手紙についてり

3606. 大晦日の朝に

3607. 大晦日の朝に見た不思議な体育館に関する夢

3608. 富山を訪れる夢

3609. 大晦日の午後に

3610. 大晦日の夜に思うこと

3611. 自らの霊性的発達の研究に向けて

3612. 新年最初の日記

3613. 新年最初の夢

3614. 白くモコモコとした毛に覆われた不思議な生き物に出会う夢

3615. ジョージ・スペンサー＝ブラウンの言葉より

3616. 懸命に生きてきたこと

3617. 新年二日目の朝に思うこと

3618. 会議室に身を潜める夢

3619. ユダヤ人の抑圧史・黄色い桜・日本料理屋に関する夢

3620. たくましい知性とゴッホの手紙より

© YOHEI KATO 2019

3601. ゴッホの手紙と必然性

昨日に引き続き、今朝も六時前に起床し、六時半を迎える前に一日の活動を始めた。フローニンゲンは普段からどこか休日であるかのようなゆったりとした時間が流れているが、年末を迎えた今の時期はなおいっそうのこと時間の流れが緩やかに感じる。実際に昨夜も、時間の流れの緩やかさを感じていた。昨日は土曜日であることを早朝に確認していたはずなのだが、その夜にはすっかりそれを忘れ、その日が何曜日であるのかが一瞬わからなくなっていた。

2018年最後の日曜日を迎えた。辺りは闇と静寂さに包まれている。

ここ最近、気温そのものは例年に比べてまだ低くないのだが、芯から冷えるような寒さを感じるようになった。オランダの家庭にはどこも十分な暖房器具が備わっており、それは今住んでいる自宅も例外ではないのだが、最近は足元から冷えることがある。寒さはこれからより厳しさを増し、そのピークは年明けから数ヶ月ほど続くだろう。

昨日から、ゴッホの手紙の続きを読み始めた。昨年のクリスマスに、イギリスの書店から購入した全六巻の“Vincent van Gogh – The Letters: The Complete Illustrated and Annotated Edition (2009)”の第一巻の続きを今日も読み進めていく。

昨夜ゴッホの手紙のいくつかを読み進めていると、芸術家、そして思想家として生きたゴッホの生き様から、何か霊感を与えられたような感覚があった。今読み進めている手紙は、ちょうどゴッホが画家を志す前に、聖職者になろうとして勉強に明け暮れている日々の様子が綴られたものである。ゴッホが画家になろうと志したのは28歳ぐらいの時であり、それまでの期間においても、ゴッホの中で絵画の関心が高かったことは手紙を通しても明らかである。実際に、ゴッホは様々な画商や美術家との交流があったようであり、様々な絵について手紙の中で詳述している。

おそらくゴッホの中には、まだ自覚がなかっただけであり、その時から絵画に向かわせた内在的な何かがあったのだろう。言い換えれば、ゴッホの魂が絵画を選ばざるをえなかった必然性のようなものがもうその時からあったのだ。そのようなことを思っていた。

© YOHEI KATO 2019

ある対象に向かわせる内在的な必然性。私もそうした必然性との出会いをこの欧州の土地で得たように思う。それは日記の執筆であり、作曲だった。確かに私がオランダの地にやってきた意識的な目的は、フローニンゲン大学に留学するためだったが、私が自覚しない無意識的な目的は、日記の執筆と作曲を絶え間なく行う自己を見出すことにあったように思えてくる。今はこの見出された自己を元に日々を生き、まだ見出されぬ自己の側面を見出すために日記と作曲に従事する毎日が続く。

来年の夏以降、私はどこで何をしているか定かではない。ただし確信を持って言えるのは、この世界のどこで生活をしていたとしても、絶えず日記の執筆と作曲に従事しているだろうということだ。新たな年も、絶えず探究活動と創造活動の中で過ごす日々を送りたいと思う。フローニンゲン:2018/12/30(日)06:42

No.1526: A Fireball on A Winter Night

The last Sunday in 2018 is now approaching the end. I can hear sounds of firecrackers from my neighborhood, which is a typical way to celebrate the New Year in the Netherlands. Groningen, 21:11, Sunday, 12/30/2018

3602. フランクフルトに降り立つ夢

昨夜ゴッホの手紙を読みながら、改めて感銘を受けていたのは、ゴッホは膨大な量の絵画作品を残したことだけではなく、それに匹敵するぐらいの、あるいはそれ以上に膨大な手紙を残していたことだ。特に、弟のテオとのやり取りに関する一連の手紙には、兄弟愛を超えて、人類愛に向かう愛を感じることができる。今日も他の活動の合間を縫って、ゴッホの手紙に目を通していきたいと思う。

ゴッホが大量の手紙を書き留めたように、膨大な量の日記を執筆していく。ゴッホが大量の絵画作品をこの世に残したように、膨大な量の曲を生み出していく。昨日は改めてそのようなことも思った。

ゴッホには手紙の宛先として常に弟のテオがいたが、自分が書く手紙の宛先は不明だ。それは一向に不明なままである。だがそうだとしても、もう手紙を絶えず書き続けること以外に自分ができることはなくなった。日々は探究活動と創造活動を通じて過ぎていくというよりも、より大きな視点で見れば、日々は宛先の不明な手紙の執筆を通じて過ぎていくといった方がいいかもしれない。

今日も何があっても手紙を書く。明日も何があっても手紙を書く。手紙を書き続けることが自分の人生になった。

今朝方もいくつか夢を見ていた。少しばかり記憶が薄れてきているので、足早に夢について書き留めておきたい。夢の中で私は、ある体育館の中にいた。そこは全く見覚えのない場所であり、ヨーロッパのどこかの国の一都市の中にある体育館のようだった。そこで私は、小中学時代の友人とフットサルに興じていた。その場にいた全員はサッカーの経験者だが、フットサルの経験があるのは私だけであった。そのため、フットサル独特の動きができるのは自分だけであり、私は友人に色々と動きを教える意味合いも込めたプレーをしていた。最初の夢について覚えているのはもうそれぐらいしかない。

もう少し覚えていることがあるとすれば、フットサルに固有の足の裏を使ってボールを動かす技術を頻繁に私が使っていたことであり、試合の途中からかなり強いシュートを相手のゴールに向かって打ち始めたことだ。

その次に見ていた夢の中で、私はドイツのフランクフルトにいた。ちょうどフランクフルトの中央駅に降り立ったところであり、上空を眺めると、空は爽快に晴れ渡っていた。どことなく季節は夏のようであり、実際に私は半袖でその場に立っていた。街の中心部を散歩しながら、私は郊外にあるサッカースタジアムに向かっていこうとした。

街の中心部からスタジアムの方を眺めると、なぜだかスタジアムがアルプス山脈を彷彿とさせるような山々の谷間に存在していることに気づいた。今いる地点よりも標高が高い地点にスタジアムがあるのだが、そこまで行く道は、街の標高よりも低い道を歩いていく必要があるようだった。

街の中心部の上空の空は快晴なのに、スタジアムのある山間の空を眺めると、それはとてもどんよりしていた。スタジアム上空を覆う不気味な雨雲が気にはなりつつあったが、私はスタジアムに向けて歩き出した。すると、私の右横から誰かが日本語で声をかけてきて、見るとそこには、フランクフルトに所属している元日本代表の選手がいた。

私たちはお互いに面識はないのだが、どこか知り合いのような雰囲気がそこにあり、いろいろと話をしながら一緒に歩いてスタジアムに向かうことにした。その選手の方は「最近は歩いてスタジアムに

行くことはないのですが、若い頃はよく歩いてスタジアムに練習に通っていたんです」と丁寧語で述べていた。その後もお互いに話をしながら、スタジアムに向かう山道を歩いているところで夢から覚めた。フローニンゲン:2018/12/30(日)07:04

No.1527: A Solemn Morning on New Year's Eve

Big fireworks were set off a while ago to celebrate New Year's Eve. The last day in 2018 began. Groningen, 10:22, Monday, 12/31/2018

3603. 知ること・自覚すること

つい今しがた、一日分のコーヒーを入れ始めた。書斎がコーヒーの香りにゆっくりと包まれていく。

そういえば、昨夜もまた爆竹音が鳴り響いていた。大晦日に向かっていくにつれて、夜に鳴り響く爆竹の数が増えることは興味深い。昨日に、ようやくオランダの年越しの祝い方を知ってから、爆竹音を不審なものだと思わなくなった。この一件からも、対象を知ることの重要性が分かる。

ある対象に気づいたとき、その正体が正確にわかっていないと、妙に不安になってしまったり、ときには恐怖心を抱いてしまったりすることがあるだろう。そうした不安や恐怖は無知から生じていることが多いのではないかと思う。そうした不安や恐怖を乗り越えるためには、ありきたりだが、まずは対象を知ること、そして対象と自己との関係を踏まえて自己自身をより深く知ることが大事なのだと思う。

今回の爆竹の一件は、すぐさま意識上にのぼるような現象であったから比較的対処しやすいものの、現実世界においては、意識に上がらない意識下の現象が私たちに多大な影響を与えていることが多々ある。私たちが日々の生活の中で不安や恐怖を覚えているものの多くは、気づきの意識が与えられていない意識下のそうした現象に発生源があるように思える。

現代社会には、私たちに不安や恐怖心を抱かせる、こうした目には見えない現象が無数に存在しており、しかもそれらは社会的に巧妙に生み出されたものであることが多い。それらに自覚的になることの大切さについて考えていたところで、一日分のコーヒーが出来上がった。

今日はこれから、早朝の作曲実践を行う。その際には、バッハの四声のコラールに範を求める。昨日は、ナポリの和音を活用する形で早朝の作曲実践を行っていた。その結果、自分の中でまた新たな響きを持つ音を活用することができるようになったと実感した。

これから行う作曲実践では、セカンダリー・ドミナント(服属7)を活用してみようと思う。これは端的には、ドミナントモーションを活用した一時転調の技術である。それぞれのダイアトニックコードに対して、完全4度下のドミナントセブンスコードを見つけることが最初のステップだ。それを各調のV7→I(Im)として一時的に活用するのがセカンダリー・ドミナントの本質になる。

セカンダリー・ドミナントは一時転調をして、その他の調の響きを一時的に借りてくる働きをするため、曲全体に程よい揺らぎを生み出すことができるだろう。人間の発達に揺らぎが必要なように、曲の発展にも揺らぎを取り入れていきたい。

早朝の作曲実践が終わったら、過去の日記を少しばかり編集したいと思う。その後、昨日から始めたウィルバーの書籍の監訳の仕事に取り掛かる。今日は第一章のレビューを行い、本文の内容をより良く理解するため、そして次の章への橋渡しになるようなコラムを執筆できたらと思う。フローニンゲン:2018/12/30(日)07:29

No.1528: Reminiscence of Sunset

Though I thought that it would be cloudy all day long today, I could see a glorious sunset, which is the last one this year. Several vapor trails were extending to somewhere far away, which seemed to tell that our time would be everlasting. Groningen, 15:56, Monday, 12/31/2018

3604. 着実に進行する流れ

時刻は午後の四時を迎えた。2018年の最後の日曜日が、ゆっくりと終わりに向かっている。

明日はいよいよ大晦日を迎える。今日は天気予報を裏切る形で、午後に小雨が降ることはなかった。これは嬉しい裏切りである。昼食前にスーパーに買い物に出かけた際には、幾分青空さえ見えたほどである。渇きを癒すかのように、太陽の光を浴びようとする自分がそこにいた。

依然として目の前には冷たい世界が広がり続けている。外の世界はなんとも言えない寂寥とした雰囲気を放っているが、今の自分はあまりそうした雰囲気に左右されないようだ。

淡々と流れる水のような生活。寝ても覚めても探究活動と創造活動に励む日々が進行していく。そこにあるのは絶えざる進行だけである。

昼食後に仮眠を取って目覚めた時、自分がこの世界にいることに対して驚いた。仮眠前の世界にきちんと戻ってきたことに対して、どこか神妙な思いになった。そこから私は、再びこの現実世界で仕事をすることにした。

午前中から午後にかけて、ケン・ウィルバーの書籍の監訳の仕事に取り掛かっていた。これから夕食までの時間を使って、再びその仕事に取り掛かる。編集者の方から随分とゆとりのあるスケジュールを提示していただいたこともあり、この仕事を焦って前に進める必要はないのだが、年明け後には諸々の協働プロジェクトが再び本格的に動き出すことを考えると、できるだけ年末年始にこの仕事を前に進めておくことが賢明だろう。

昨日は序章をレビューし、今日は一章をレビューしている。毎日一章ずつレビューをしていけば、一月の最初の週にはレビューが完成する。レビューに合わせて、各章に対して解説の文章を執筆していく予定である。翻訳文だけでも随分と分量があるため、私の解説文がどのような形で、そしてどれほど挿入されるかは編集者の方と話し合って最終的に決めていく必要があるが、とりあえず各章の内容をもとに、本文には書かれていない補足説明を行うような文章を執筆していこうと思う。

今日の監訳の仕事が終われば、夕食後には再び作曲実践を行う。その際にはモーツァルトに範を求めようと思う。今朝の早朝実践では、セカンダリー・ドミナントを積極的に活用してみた。その実験から得られたものは多く、早朝の作曲実践においては、しばらくこの技法を活用してみようと思う。また、先日に実験をしたナポリの和音も使いどころを見てうまく活用していく。というよりも、今の私はその使いどころがどこなのかを見極めていく感性を養っていくことが最優先だ。

そうした感性を養うためには、兎にも角にも理論的な観点から、分析的に曲と接していく必要があるだろう。そうした実践を絶え間なく継続していった先に、感性が花開いていくだろう。絶え間ない探

究活動と創造活動を通して2018年の終わりと2019年の始まりを祝いたい。フローニンゲン：2018/12/30（日）16:21

3605. 監訳の進捗と音楽を通じた手紙について

2018年の最後の日曜日が終わりに向かっている。今日も普段と何一つ変わりなく、自分のライフワークに従事し続けていた。日記の執筆、作曲実践、そして書籍の監訳など、諸々の事柄が自分のライフワークとして進行している。

今日は計画通りに、監訳中の書籍の第一章のレビューを終えた。丁寧に一文一文読んでいたため、時間はかかったが、予定通りの分量のレビューを行うことができた。レビューをしながら、何度も読んできたはずの本書から新たな学びを得ている自分がいた。それはおそらく、今回は監訳者としての立場から本文を読んだという理由もあるだろうし、何よりも本書と出会ってからの九年間において、インテグラル理論や発達理論に関する理解が深まっていったという理由が挙げられるだろう。

明日は大晦日であるが、そうしたこととは一切関係なしに、本書の監訳の仕事を行おうと思う。とりあえず、全七章のレビューをまず行い、その後に各章末にどのようなコラムを挿入するかを考えていく。一番重要なのは、読者の方が本書をより良く理解してもらえるための工夫をすることであり、各章末にコラムを挿入することが過剰であると判断した場合には、それを挿入しないようにする。想定読者である実務家の方たちが読んで参考になるようなコラムを執筆したいと思う。この点については、実際にジョン・エフ・ケネディ大学でインテグラ理論を体系的に学んだ経験と、留学中に米国のインテグラルコミュニティーに所属していた経験を活かしていきたいと思う。

インテグラル理論を深く探究することを志し、留学を決意させたきっかけになった書籍を九年後の今このようにして監訳していることが不思議でならない。自分が歩いてきた九年間に何らかの意味があったのかもしれないと感じる。そして、その九年間で少しばかり積み重ねてきた知見を本書を通じて世に共有したいと思う。知識と経験の共有。それは今後一生涯を通じて行ってきたい事柄である。

時刻は午後の八時を迎えつつある。今日はこれから本日最後の作曲実践を行いたい。

計画していた通り、モーツァルトの変奏曲に範を求めたいと思う。その後、過去の日記の編集を少しばかり行う。昨日、昨年の日記を読み返していると、音楽に関する面白い記述があった。その記事を読み返しながら、改めて、普段過去の作曲家の楽譜を眺める際に、音符は文字に該当し、モチーフは言葉に該当し、フレーズはセンテンスに該当する、という観点を絶えず持っておきたいと思った。

楽譜には作曲家の言葉の質感が滲み出している。それを汲み取ることを常に意識する。今の私は、自分の内的感覚や思想などを音楽として表現するための言葉が不足している。厳密には、作曲に活用できる音楽的な語彙体系をまだほとんど獲得していないと言えるだろう。

これからは、過去の作曲家の無数の楽譜と接する中で、音楽空間上の言葉、フレーズ、センテンスを獲得していきたい。それらの習得作業を日々積み重ねていけば、いつか日本語で手紙を書くように、音楽を通じて手紙を書くことが自由自在にできるようになるだろう。そこまでただひたすらに学習と実践を続け、そこからもただひたすらに学習と実践を続けていく。この人生が終わるまで、音楽を通じた手紙を書き続けたい。フローニンゲン：2018/12/30（日）20:01

3606. 大晦日の朝に

2018年の大晦日を迎えた。フローニンゲンで迎えた大晦日の朝はとても静かだ。

今日はいつもより少し遅く、午前七時に起床し、七時半から一日の活動を始めた。それは、2018年最後の活動を意味している。面白いことに、数日前から年越しを祝う爆竹音が夜に鳴り響いていたが、それは大晦日を迎えるに連れて数が増えていた。昨夜はここ数日間の中では一番爆竹音が聞こえていた。そうなってくると、大晦日を迎えた今日の夜がどれほど爆竹が鳴らされるのか楽しみである。今日は爆竹のみならず、花火も打ち上げられるだろう。

2018年を締めくくるにあたって、私は何か特別なことをしようと計画していない。いつもと同じように自分のライフワークに取り組むことだけ。それが最良の年越し方法であり、最良の新年の迎え方だと思う。今日もまた、探究活動と創造活動に従事していく。今日はゴッホの手紙の続きを読み、日記の執筆と作曲実践に従事していく。さらには、昨日と同様に、監訳中の書籍の第二章のレビューを行いたい。

昨日どのようにレビューし、どれほどコメントをするかの基準のようなものが自分の中にできたので、その基準に基づいて今日もレビューを実施していく。このペースでレビューをしていけば、新年の第一週の日曜日にはレビューが終わる。一日のレビュー量は無理のないものにしているため、そのペースが最も望ましいだろう。レビューが終わったら、次の週からは、各省末に挿入する予定のコラムを実際に執筆していく。

今はレビューに専念しており、実際のコラムの文章を執筆しないようにしている。これは本書の構成上、ある章の内容が続く章の中で言及されていることが多々あるので、私の解説が不必要なことがあるからであり、さらにはコラムをいざ執筆しようとした時に、後半の章で書かれている内容を踏まえてコラムを執筆した方が、より有意義なものが書けるように思えたからである。それらの理由から、レビューとコラムを並行させるのではなく、まずは全ての章をレビューすることに集中し、レビューが終わってから再度文章を読み返す形でコラムの執筆を行っていく。そうした作業を一月の第二週に行いたい。

闇に包まれた住宅地から、一台の車がヘッドライトをつけて通りをゆっくりと走っている姿を見た。その車はこれからどこに向かうのだろうか。

昨日ふと、どういうわけか、シュタイナー教育を受けた二人の日本人の知人について考えていた。とりわけ、二人に共通している特質について考えていた。おそらくシュタイナー教育を受けると、その人の固有の魂が真に涵養されていくのだと思わせてくれたのがその知人の二人である。魂が継続的に涵養され、人間性の発達が成人になっても止まることなく継続している点は注目に価する。

固有の魂を発見し、それと寄り添いながら魂を深めていく教育。それがシュタイナー教育の核にあるように思えてくる。シュタイナーの思想、およびシュタイナー教育については引き続き探究を続けていきたい。フローニンゲン：2018/12/31（月）07:53

No.1529: Two Types of “C”-Type Blood

I couldn’t imagine that I would compose such a queer piece of music on the last day in 2018. Yet, I think that this kind of unpredictability symbolizes our life that is completely incomprehensible and mysterious. Groningen, 21:33, Monday, 12/31/2018

3607. 大晦日の朝に見た不思議な体育館に関する夢

時刻は午前八時を迎えようとしている。相変わらず、この時間帯はまだまだ真っ暗であるが、通りを走る車がちらほら現れ始めた。

大晦日である今朝方も夢を見ていた。それは2018年最後の夢になるだろう。

夢の中で私は、綺麗な体育館の中でバスケをしていた。見ると、そこには中学時代の部活の先輩が多くいた。私は一つ上の学年の中に混じってバスケをしていた。それは部活動のようなものではなく、より遊びに近かった。

実際に私は、中学時代に一つ上の学年の先輩たちに混じって練習に参加することがよくあり、同時に彼らとは仲が良かった。「仲が良かった」というよりも、彼らが私のことを可愛がってくれていたと言った方がいいかもしれない。

先輩たちとしばらくバスケをしていると、一旦シャワーを浴びたい気分になった。体育館にはシャワー室が設置されているのを知っていたから、私はそこに向かうため、一度体育館の外に出た。外に出た瞬間に、涼しい風が頬を伝った。空を見上げると、夏の太陽が燦然と輝いていた。

季節は夏のようだが、時折吹き抜けていく風は本当に清々しい。私はしばらくその清々しい風を浴びていた。

ふと右を見ると、そこにはバスケ部に所属していた親友（HO）が立っていた。なにやら、彼も先輩たちに混じってバスケがしたいとのことである。私は彼に、「全く問題ないと思うよ」と伝えた。すると彼は嬉しそうな表情を浮かべて、飛び跳ねるようにして体育館の中に入っていた。

親友が体育館の中に入るのを見届けた後、私はシャワー室に向かった。シャワー室のドアを開けると、先ほどの体育館の綺麗さとは異なり、若干汚いように思えた。とはいえ、不満を述べていてもしょうがないと思った私は、入り口に近いシャワーの栓を開けた。するときちんとお湯が出てきたが、やはり入り口に近い場所よりもより奥のシャワーを使おうと思った。

私が奥のシャワーに辿り着いた時、入り口から誰かが入ってきた。見ると、先ほどまで一緒にバスケをしていた二人の先輩だった。二人の先輩は私の存在に気付き、「もうそろそろ練習終わっちゃうよ」と述べた。私はてっきり、先ほどまでは単なるウォーミングアップのような遊びであり、本格的な練習はこれから始まると思っていたため、先輩の言葉に少々驚いた。

私はまだバスケをしたかったこともあり、急いでシャワー室から出て、再び体育館に向かった。体はまだ濡れたままだったのだが、体育館に着いてみると、もうそこには誰もいなかった。厳密には、そこには先ほどまで一緒にバスケをしていた先輩たちではなく、バレーをしている一般市民の人たちがいた。

私はその光景を見て、少しおかしいと思った。シャワー室に入ってからそれほど時間が経っていないのに、先輩たち全員が消え、その代わりに一般市民の人たちが体育館にいるのがおかしいように思えた。この点について考えてもわからなかったため、私は再び体育館の入り口から外に出ようとした。すると、先ほどシャワーを浴びていた二人の先輩がタオルで髪の毛を拭きながら歩いている姿を見つけた。私は先輩を呼び止め、体育館の異変について話した。先輩たちも一瞬その異変をおかしなことだと思っていたが、一人の先輩がふと呟いた。

先輩:「そういえば、この体育館は、休憩として外に一旦出ると、次に体育館に戻る時は反対側の入り口から入らないとダメなんだ」

私:「どういうことですか？」

先輩:「実はこの体育館は、全く同じ造りのものが二つ存在していて、それらは北と南に分かれてるんだよ。例えば、北の体育館で練習をしていて、一旦休憩として外に出ると、南側の入り口の前に出たことになってしまう。だから休憩から戻る時には、その入り口ではなく、大回りして北側の入り口から入り直さないといけないんだ」

先輩のその解説を聞いて、最初は不思議に思ったが、妙に納得している自分がいた。先輩二人は私に別れを告げ、その場から去って行った。その場に残った私は、もう少しこの不思議な体育館について考えていた。フローニンゲン:2018/12/31(月)08:18

No.1530: The Morning on New Year's Day

It stopped drizzling, and now the weather is gradually fine. I expect to see the sunrise on New Year's Day. Groningen, 09:20, Tuesday, 1/1/2019

3608. 富山を訪れる夢

時刻は午前八時半に近づきつつあり、空がようやくダークブルーになり始めた。2018年最後の一日が今始まろうとしている。

今朝方見た夢については、実はまだその続きがある。体育館で先輩たちとバスケをした後に、二人の先輩と体育館の不思議な仕組みについて話をしていた。その二人の先輩と別れた後に、実はもう一人別の先輩と話をしていた。その先輩は、何やらこれから実家の富山に向かうとのことであった。不思議なことに、先ほどまでは中学生の頃のような感覚があったのだが、その先輩と話をし始めた途端に感覚が大学生の頃のものに変わった。さらには、その先輩が同じ大学に通っているという設定になっていた。

私:「実家にはよく戻られるんですか？」

先輩:「そうだね、東京から富山まではあまり遠くないから。二日休日があればよく実感に帰ってるよ」

どうやらその先輩は富山を愛しており、同時に両親のことを大切に思っているらしいことがわかった。中学校時代のその先輩は後輩に対しては優しかったが、ある特定の先生に対しての態度はかなり反抗的であり、その激しさを知っている分、両親のことを大切に思っていることが微笑ましく思えた。

私は富山にはまだ一度も足を運んだことがなかったので、先輩の実家の近くまで一緒について行かせてもらえないかを尋ねた。すると、その先輩は快諾をしてくれ、これから富山に一緒に行くことになった。すると、私たちの目の前に、私は面識がなかったのだが、その先輩の友人らしき人物が現れ、その方もこれから実家に戻るのだと言う。しかしその方の実家は富山でなく、近隣の県だった。

その方の実家は山の上にあるらしく、「途中の坂道を車で登る時には、馬力全開にする必要があるんだ」と、車のハンドルを動かすような仕草をしながら述べていた。何やら、その時に発揮する力は「6馬力」とのことだった。私は1馬力がどれくらいの力なのか分かっておらず、6馬力と言われてもピンとこなかったが、その方のジェスチャーを見ていると相当な力なのだろう。

その方が話し終えた後、富山に実家のある先輩と顔を見合わせた瞬間に、私たちは先輩の実家の近くにある海にいた。その海は水が透き通るほどに美しかった。私は富山の海を見たのは初めてであり、感激をしていた。すると先輩が一言述べた。

先輩:「確かに海は綺麗なんだけど、家庭用の水には不純物が混じってるんだ」

そのように述べた先輩は、おもむろに遠くの方を指差した。見ると、そこには良く整備された緑豊かな公園があった。

先輩が突然公園に向かって走り出したので、私も先輩を追う形で走り出した。公園に到着すると、そこは休日のようなのどかな雰囲気を発しており、芝生で遊ぶ人たちの姿があった。

公園の入り口付近には、傾斜のある芝生が存在しており、先輩はその芝生を駆け下りるかのように下に向かっていった。私もあとを追うようにして傾斜のある芝生を降りていこうとしたが、できるだけゆっくりと降りるようにした。というのも、そこから見渡せる景色が大変素晴らしく、その光景を味わいたいという思いがあったからである。

ゆっくりと芝生の斜面を降りていると、後ろで風船サイズのゴムボールで野球をしている大学生ぐらいの人たちがいることに気づいた。私は特に気にかけなかったが、バッターがボールを飛ばす方向に自分がいるような気がしていた。すると案の定、次のバッターが打ったボールが私の方に飛んできて、私の背中にぶつかった。それはゴムボールであるから、一切痛みはなかった。

実は私は自分の背中にボールが飛んでくることを最初から予期しており、背中にボールがぶつかった瞬間に、それを背中で一度リフティングし、そこからは肩と背中を使ってそのゴムボールをリフティングするというパフォーマンスをした。ボールを拾いに来た大学生や周りにいた人たちは、私のパフォーマンスを見て驚いていた。少しだけパフォーマンスをした後に、私はすぐにそのゴムボールを

大学生に返した。そのようなパフォーマンスに興じていたせいか、先を行く先輩はもう随分と遠くの方にいた。見ると、先輩は遠くの方にある一軒の家に入っていった。そこは家のようでありながら、同時に公民館のようにも見えた。その家の前に到着してみると、確かに作りは公民館のようだった。ふと玄関の方を見ると、そこで野球をしている友人を見つけた。彼らは硬式球を使ってトスバッティングのような練習をしていた。

そこには何かネットがあるわけではなく、玄関から公園に向かってボールを飛ばすことがなされていた。私が友人に話しかけると、野球とは縁もないような友人が突然その場に現れ、「野球がしたい」と彼が呟いた。その玄関には二つの扉があり、もう片方の扉を開ければ、そこで野球ができると思ったので、私たちは隣で行われているのと同じようにトスバッティングのような練習をすることにした。いざ、扉を開けて野球をしようと思った瞬間に、家の奥からその家の住人ないしは管理人のような中年女性が出てきた。

開口一番、「ちゃんと許可を取ってやっているのか」と、その女性は少し厳しい口調で述べた。私はちょうど扉の外にいて、その女性から私の姿は見えていないようだった。玄関の中にいた友人たちは、その女性の問いに対して少し慌てふためているようだった。どうやら玄関で野球をする許可を取っていないらしかった。それを察した時、私はその場からそっと逃げるように、別の入り口からその家の中へ入っていった。

すると、その家は大きな体育館のような作りになっていることに気づいた。私は体育館の二階に行き、二階の小さな通路を歩いていると、左手に小さな階段を見つけた。それは上にも下にも行ける階段だった。階段を見上げると、女性がさらに上の階に上っていく気配を感じた。私も上の階に上がっていこうとしたところ、その女性が階段を降りてきて、自分の存在に気づいてしまうかもしれないと思った私は、身を隠すように近くのトイレの中に駆け込んだ。

右手に女性用の個室のトイレがあり、左手に男性用の個室のトイレがあった。男性用の個室に入り、私はそこでしばらく身を潜めていようと思った。トイレには小窓があり、そこからは先ほど通った開放的な公園が見えていた。フローニンゲン：2018/12/31（月）09:07

No.1531: Feelings on New Year's Day

Now it is the evening on New Year's Day. The first day in 2019 is approaching the end. I'll get started on supervising a translation. Groningen, 16:28, Tuesday, 1/1/2019

3609. 大晦日の午後に

時刻は午後の二時を迎えた。つい今しがた仮眠を取り終え、これから午後の活動に入っていく。大晦日も普段と変わらずに、自分のライフワークに従事することができている。明日もそのような一日になるだろう。

午前中に引き続き、午後から主に取り掛かるのはウィルバーの書籍の監訳の仕事である。年末年始にかけて本書の監訳を進めていきたいという思いが自分の中にあり、そうした思いが今の自分を後押ししているようだ。本書が無事に世に送り出されたら、きっと私はこの年末年始の自分の思いについて思い出すだろう。

とにかく自分の知見と経験を共有していくこと。その考え方に基づいて、大晦日であっても関係なく、自分の仕事に取り掛かる自分がいる。

振り返ってみると、これまでの人生において大晦日と元旦に仕事に従事していたことは一度もないのではないかと思う。そう考えると、今年の年末年始は特別だ。そのようにして始まる新たな年はきっとまた特別な年になるだろう。

午前中より、フローニンゲンの町中が花火や爆竹で賑やかだ。今も時おり花火が打ち上げられる音や爆竹の音が聞こえて来る。そのように書いていたところ、今もまた「バン、バン、バン」と花火が上がった。

以前の日記で書き留めていたように、花火は市が打ち上げるものではなく、一般市民が打ち上げるものであり、それは派手なものではなく、幾分滑稽に思えるほど小さなものだ。忘れた頃に花火や爆竹の音が時折鳴り響く奇妙な一日が続いている。午前中に誰かが打ち上げた花火を見たとき、もう何発か続くのかと思っていたら、単発に終わって少々笑ってしまった。その瞬間、実家にいる愛

犬と遊ぶ際に、私がすぐに遊びを終えようとすると、「もうおしまい？」と寂しそうな表情を浮かべる愛犬の姿を思い出した。

たった今、「ヒューヒュー」と鳴る音が聞こえ、誰かがねずみ花火に火をつけたようだ。その後、銃声のような爆竹音が聞こえてきた。今日のフローニンゲンは、どこか滑稽な戦場のように思える。昼食中も、食卓の窓から誰かが打ち上げた小さな花火を見ていた。

花火で新年を祝うよりも、私は除夜の鐘の方が趣が深いように思える。これは私が日本人だからだろうか。一方で、こうした寒々とした冬に、花火を盛大に──大きさではなく単に量が多いだけ──打ち上げることは、周りの雰囲気と対極をなしており、それはそれで面白いと言えるかもしれない。

そのようなことを考えていると、今から一年半以上も前に訪れた、ウィーンでの出来事が思い出された。市内から少し離れた場所を散歩しながら、ベートーヴェンの博物館に向かっていた時に見つけた日本庭園のことを思い出していた。あの時に感じた、どこか安らぐ感覚を忘れることができない。外国にいながらにして日本にいるかのような感覚があった。

あのような場所が身近にあれば、私はこれからもこの世界のどこかで生活を営んでいくことができるだろう。物理的な場所だけではなく、精神的な意味での安らぎの場所をこれから見つけていきたい。人生の季節に応じて、物理的・精神的な安住の地が絶えず目の前に現れてくるだろう。フローニンゲン：2018/12/31（月）14:31

3610. 大晦日の夜に思うこと

つい先ほど夕食を摂り終え、これから本日を締めくくる活動に従事していく。それはすなわち、2018年を締めくくる活動を意味している。その活動として、過去の日記を編集することと、モーツァルトの変奏曲に範を求めて作曲実践を行うことをしたい。

時刻は午後八時に近づきつつある。相変わらずドンパチと花火や爆竹の音が鳴り響いている。いや、これから年越しを迎える深夜にかけて、それはより激しくなるだろう。夕食を食べながら、近所で打ち上げられる花火を眺めていると、一つ思うことがあった。私がオランダの文化を尊重している点として、芸術が生活に根ざしたものになっていることが挙げられる。

芸術が日常生活の中に浸透し、溶け込んでいると言っても過言ではないだろう。実際に、オランダ人の家には──私が現在借りているアパートの一室にさせ──絵画作品がほぼ必ず飾られている。オランダ人にとっては、少なくとも絵画芸術は生活においてなくてはならないものなのだ。そうしたことを思いながら、芸術を愛するオランダ人なのだがから、もう少しセンスのある花火をあげてほしいところだ、と思っていた。

ゴッホ的、あるいはフェルメール的な花火を期待するのは無理があるかもしれないが、少なくとも、もう少し工夫のある花火や爆竹を上げることはできないだろうか、と思ってしまう。なりふり構わずドンパチする狂気的なところはゴッホ的と言えなくもないが・・・。

今日は天気予報を嬉しい形で裏切り、夕方には輝く夕日の姿を拝むことができた。それは、今年最後の夕日であった。夕日が現れた時、空には幾筋もの飛行機雲が流れており、それらはどこか遠くの世界へと繋がっているような道に見えた。

空を駆ける白い道。夕方に見た飛行機雲はそのように形容できるだろう。それはどこまでも遠くに伸びていて、この先も時間が永劫であることを語っているかのようだった。来年の一年間を、そのような時間感覚の中で過ごすことができるだろうか。できるかもしれない。そのためには、絶えず自分のライフワークに従事していくことが肝要だ。一寸も自らのライフワークから離れない生活。そうした生活を来年も送っていく。

夕食を食べる前に、自分にとって他者と共に生きるというのは、文章としての、曲としての日記を絶えず書き残していくことだと思った。日記を執筆しながら自らの人生を歩んでいくことが、他者と共に生きることと同義であることを知る。

毎日綴る日記は単なる日記ではなく、詩のようなもの、かつ手紙のようなものだとみなしていこう。宛先人が不明の詩と手紙を絶えず書き留めていく。それは、他者に自分の知見や経験のみならず、自分の人生そのものを共有する生き方だと言える。そのような人生を来年も、そしてこれから未来永劫歩みたいと思う。フローニンゲン：2018/12/31（月）19:51

3611. 自らの霊性的発達の研究に向けて

これから就寝に向けて、本日を締めくくる活動、そして2018年を締めくくる活動に従事していく。午後にふと、過去に作った「Op.717 桃源郷の川」という曲を聴いていた。それは、数日前に見た夢の景色を参考にして作ったものだ。夢の中の桃源郷を流れる川を下って行く時の時間感覚を曲にしたものである。あの夢の印象が強い分、夢をもとにした曲はとても印象深い。

先ほど夕食を摂っている最中に、今後学術機関で伝統的な意味での科学研究に従事することはもうないだろう、ということを考えていた。これは科学的な研究に一切関心を示さなくなったということを意味していない。そうではなく、旧態依然とした科学的な研究に幾分辟易しているだけであり、より包括的かつ本質的な方法で行う科学探究にはむしろ強い関心を持っている。特に、ルドフル・シュタイナーが実行しようとしていた霊性の科学や、ケン・ウィルバーが提唱する方法論に則った霊性の科学には依然として関心がある。そして、それは日増しに強くなるばかりだ。

以前考えていたように、私は近い将来、シュタイナーが提唱した人智学を深く探究することのできるスイスのドルナッハにある精神科学自由大学でその探究に乗り出すかもしれない。

実は、毎日執筆している日記と毎日作っている曲が、そうした霊性の科学を実施するための貴重なデータになるかもしれないと考えている。教育哲学者のエリオット・アイスナーがスタンフォード大学で博士課程の学生を指導していた時に、ある学生が、「小説を博士論文として提出できませんか？」と尋ねたそうだ。その問いに対して、当時のアイスナーはNoと答えたそうだ。しかしその後、アイスナーの考えは変わることになる。

少しばかり進歩的な発想を持って考えてみると、自ら執筆する小説作品が博士論文になりえなくもないことがわかる。確かに、芸術と科学は領域が異なり、現代社会においては、依然としてそれらは切り離されて考えられている。しかし実際には、それらの領域は、お互いに見えない形で影響を与え合い、共通する部分があることを考えてみると、小説作品が博士論文になり得る可能性が見えてくる。

そこまではいかなくとも、ジャン・ピアジェやポール・ヴァン・ギアートが自分の子供を対象にして発達研究を行ったように、私は自分自身を対象にして、自らの霊性の発達を探究してみたいと思い始

めている。まさにそうした研究を行うための貴重なデータとして、日々執筆している日記や日々作っている曲、そして日々描いているデッサンが存在している。例えば、カリフォルニアのソフィア大学などでは、自分の日記、さらには自分が作った曲や絵と自らの霊性発達を関連付けて研究を行う機会があり、それを博士論文としてまとめることができるかもしれない。それは本当に自分をより深く知るための研究であり、自らの存在に深く根付いた研究だ。

そうした研究も射程に入れて、引き続き日記、曲、デッサンの創造に励んでいく。自分を対象にすることができればそれが一番望ましいが、それが難しければ、自分が敬意を表する芸術家の作品とその人物の霊性的発達を関連付けた研究を行いたい。2018年の最後の夜にそのようなことを考えていた。フローニンゲン:2018/12/31(月)20:01

3612. 新年最初の日記

今朝は六時に起床し、六時半を過ぎた頃に一日の活動を始めた。いよいよ今日から新たな年が始まった。新年早々、この時間帯のフローニンゲンは小雨が降っている。それはもうじき止むようだが、今日は一日中曇りのようであるから、初日の出を拝むことは難しそうだ。

それにしても昨夜は、本当に盛大な年越し祝いが町中でなされていた。もちろん私は夜に外出したわけではないのだが、盛大な花火が近所で打ち上げられ続けていたことは、家の中にいてもよくわかった。

以前の日記で書き留めていたように、基本的には個人で花火や爆竹を鳴らすことがオランダの年越しの方法らしいのだが、昨夜はフローニンゲンの市が主催をしたものなのか、かなり派手な花火が長時間にわたって打ち上げられていた。それは私が就寝しようと思っていた夜の10時ぐらいから始まり、なんと深夜一時近くまで花火の音が鳴り続けていた。正直なところ、花火のせいでなかなかな眠りにつくことはできなかったのだが、早朝の今はそうしたことを感じさせないぐらいに調子が良い。眠りの意識に落ちて、意識の深い層で休息を取ることが理想だが、横になっておくだけでも随分と休息の効果があることがわかる。

起床して一時間が経とうとしているが、新たな年に向けて、自分の内側のエネルギーが充満しており、幾分新たな質を持っているようにさえ思う。今日も普段と変わらずに、自分のライフワークに打ち

込んでいこうと思う。今日もまず最初に、バッハのコラールを参考にして作曲実践を行いたい。昨夜、バルトークの『ミクロコスモス』を参考にして作曲実践をしている時に考えていたのは、バルトークのこの作品とバッハのコラールを参考にする際は、諸々の技術を試す実験の場としよう、というものだった。それら二つの一連の作品群は、曲としても長くなく、複雑な構造を持っているわけでもないので、それらを参考にする際には様々な作曲技術を適用しやすいと感じている。これから行う作曲実践でも、新たなことを試すことや、最近試し始めた技術の基盤をより強固にするための試みに従事していきたい。

その他に今日優先して行いたいのは、ウィルバーの書籍の監訳の仕事である。今日は全七章のうちの第三章のレビューを行っていく。本書の中で第三章は分量が多い方であるため、今日は十分な時間を設けて本章のレビューを進めていく。

監訳の仕事を数日前から本格的に始めることに伴って、私が執筆を担当する冒頭の「はじめに」と解説の文章に関するアイデアが突発的に色々と湧いてくる。特に、入浴している最中やご飯を食べている時、さらには就寝前にそうしたアイデアがよく浮かぶ。昨夜も実際に、就寝前にいくつかアイデアが降ってきたので、それを枕元の裏紙にメモし、今朝の起床直後にそれをワードに書き出しておいた。現在はこのように、実際の文章を書き始めるのではなく、どのような項目をどのように執筆していくのかのアイデアを練る段階にあると言えるだろう。

今日もおそらくいくつかのアイデアが降ってくるかもしれないので、それを逐一メモし、執筆担当箇所の文章の具材にしたい。これが2019年最初の日記であり、特に新年の抱負のようなものを書いていないことに気づく。2019年もこれまで行ってきたことを継続していくことが何よりも大切だろう。

働き方や生活の営み方を含め、これまでの生き方を継続していき、それを深めていくような年にしたい。新年は、生き方を深め、人生を深め、深められた自己を持ってこの世界にさらに深く関与していくような年になるだろう。フローニンゲン：2019/1/1（火）07:08

No.1532: Something for Tomorrow

The first day in 2019 is now approaching the end. Today was exactly the same as usual.
Groningen, 21:14, Tuesday, 1/1/2019

3613. 新年最初の夢

たった今、一日分のコーヒーを入れ始めた。それは新年最初のコーヒーになるだろう。よくよく考えてみると、起床してすぐに歯を磨き、顔を洗ったことや、その後にヨガを実践したことなどを含め、それら全てが新年最初の実践であったことを知る。

全ての事柄を日々新たな気持ちを持って取り組むこと。それができれば日々の生活がより充実したものになるだろう。2019年は、毎日の一つ一つの実践を絶えず新たなものだと認識し、そうした実践に従事できる喜びと幸福を感じながら過ごすような年にしたい。そのようなことをコーヒーを入れながら考えていた。

昨夜は随分と遅くまで、花火が派手に打ち上げられていたため、熟睡していた時間は少ないのだが、幸いにも心身の調子は良好だ。今朝方は、新年最初の夢をいくつか見ていた。

夢の中で私は、ある小学校を訪問し、そこで子供たちの親に何かのレクチャーをすることになっていた。気づいたときにはすでに教室の中にいて、すでにレクチャーを始めていた。ただし始められていたレクチャーは私のものではなく、なんと私の母がインテグラル理論の概要を解説していた。その場にいた私は、最初少しばかりそれを驚いたが、きちんとインテグラル理論の概要を解説している母を見て、驚きはすぐに安心感に変わった。

母のレクチャーが終わった後に、私のレクチャーの番になった。私は、インテグラル理論に関する実践的な内容を説明する予定になっていた。いざ自分のレクチャーを始めようとした時に、教室の後ろみると、そこには父が立っていた。子供たちの両親に混ざり、私の父が熱心に母と私のレクチャーに耳を傾けていた。レクチャーの冒頭で、少し会場の雰囲気を和らげるような小話をしたところで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私はある進学塾で、一人の小学生に数学を教えていた。それは算数ではなく、高校数学か大学数学だったように思う。その子との授業を終えた後、塾が入っているビルから外に出て、私は駅に向かおうとした。すると、私の横には父がいて、さらに父だけではなく、私よりも幾分年上の男性たちが何人かいた。私たちは皆、駅に向かっていた。その列の先頭を見ると、ひときわ

背の高い日本人男性がいる。父とその方は知り合いのようであり、父がその方に身長を尋ねると、190cmほどあるという。どうりで大きく思えるわけである。

しばらく周りの男性たちと話をしていると、すぐに駅に着いた。駅のプラットホームに向かうため、エスカレーターの方向に歩いていると、小学生の集団に出くわした。彼らは学校帰りなのか、何か遠足中なのかわからないが、元気に溢れている。先頭を行く男の子たちは元気いっぱいであり、たわいもない話をしながら幾分駆け足でエスカレーターを上っている。一方で、幾分冷静な様子をしている女の子たちは、エスカレーターをゆっくりと上りながらませた話題を話している。先頭を行く男の子たちは少しはしゃぎすぎているようであり、エスカレーターを降りる中年の女性に接触してしまったようであり、その女性は文句の言葉を叫んでいた。

上りと下りが一緒になった不思議なエスカレーターを眺めながら、私はその左横の階段を使ってプラットホームに向かった。どうやら私が乗ろうとする列車がプラットホームに到着したようであり、私は慌てて階段を駆け上がり、列車に向かった。

ドアがもう閉まり始めており、私はなんとかそれをこじ開ける形で列車に乗った。すると左手に高校時代の友人の姿を見かけた。そしてその奥に、小中高を共にした友人（TK）がいた。まずは高校時代の友人に簡単に挨拶をし、次に小中高時代の友人に話しかけた。列車の中はすでに人が多く、空いている席はないように思えた。しかし、その友人が彼の前のスペースを空けてくれて、そこに座ることができるようにしてくれた。私は友人にお礼を述べ、そこに腰掛けた。

すると、列車が次の駅に到着したようであり、乗客の何人かがそこで降りたため、座れるスペースが車内に増えた。私はそれを確認して、別の席に移動することにした。その席に腰掛け、本を読み始めていたところ、「あっ、こんなところにいた！」と私に声をかけてくる人が現れた。見ると、大学時代のゼミの友人の一人（TK）だった。列車の奥の方を見ると、そこにはゼミの他の友人たちがいた。フローニンゲン：2019/1/1（火）07:41

No.1533: In This Repressed Era

I’m looking at the sunrise right now. I always have something to think about. Groningen, 09:39, Wednesday, 1/2/2019

3614. 白くモコモコとした毛に覆われた不思議な生き物に出会う夢

今朝方の夢について先ほど書き留めていた。夢の中に現れた、上りと下りのエスカレーターが象徴すること、さらにはそのエスカレーターに乗らずに、階段を使っていた自分が象徴することについて少しばかり考えていた。今もまだ、少しばかり思い当たることについて考えている。

書斎の窓から外を見ると、小雨がまだ降り続けており、小さな雨滴が窓に付着している。時刻は午前八時を迎えようとしているが、外は一向に闇に包まれたままである。

今朝方はその他にも夢を見ていたことを思い出した。夢の中で私は、サッカースタジアムのゴール裏で、日本以外のアジアの国同士のユース世代の試合を観戦していた。その試合は拮抗しており、どちらが勝ってもおかしくないような状況が続いていた。試合が終盤に差し掛かった時、片方の国にペナルティーキックが与えられた。

すると相手側の国の選手全員──それはベンチにいる選手も含めて──がゴール前に整列し始めた。選手の数があまりにも多かったため、もうボールがゴールに入る隙間がない。それでも相手チームのキッカーはペナルティーキックを蹴り、案の定、ゴール前の選手の壁にぶつかった。そこで試合終了のホイッスルが鳴った。

その試合を終えた後に、私はユース世代のアジアの勢力図が変化していることに気づいた。具体的には、今回のアジア大会で言えば、アジアで最も強い国がタイかカンボジアになっており、日本はアジア二位であった。幸いにも日本は次の国際大会に参加できるようになったのだが、アジア二位での突破であったため、国際大会のトーナメントで少し不利な組み合わせを強いられることになってしまったようだ。それを知った時、夢の場面が変わり、私は学校の校庭の上にいた。

そこでは友人たちがサッカーに興じていた。私もそれに混じってサッカーをしていると、グラウンドの隅に、モコモコした小さな生き物がいることに気づいた。それはふわふわとした白い毛で覆われており、サッカーボールほどの大きさだった。その生き物に近づいていると、なんと人間の言葉を話せるようだった。その生き物を見ると、自分よりも少し小さいボールの上に乗って、なんとかバランスをとりながら地面を動き回っていた。

私:「何をしているの？」

不思議な生き物:「ボールの上に乗ってバランスをとる練習をしてるんだ」

その小さな生き物は、見た目もそうだが、声もとても可愛らしかった。そこで私はちょっとちょっかいを出してやろうと思った。

最初のうちは、ボールの上に乗りながら一生懸命バランスをとっているその生き物の後ろから応援の言葉をかけていたが、そこでバランスをとっているボールを蹴飛ばして、地面に尻餅させてやろうと考えた。そして実際に、だるま落としの要領で、不思議な生き物が乗っているボールを地面に水平方向に蹴っ飛ばした。すると、モコモコした不思議な生き物は、地面にストンと落ちた。すると、その生き物は怒った様子を見せず、何事もなかったかのように、地面の上をウロウロと動き始めた。その後、私たちは何事もなかったかのように会話をしていた。

私:「あっ、向こうの地面に小さな穴があるよ」

不思議な生き物:「本当だぁ、行ってみよう」

不思議な生き物はそのように言うと、ゆっくりとそっちの方向に動き出した。その表情はどこか嬉しそうである。私はその生き物の後ろをつけるような形で、その穴に向かっていた。見るとそこには、誰かが作った落とし穴があった。しかしそれは人間にとってはとても小さく、その生き物にとっては少し大きい落とし穴だった。より厳密には、その生き物の体が三つ入るほどの大きさだった。この生き物がこの落とし穴に落ちてしまったら、どのようにそれは脱出しようとするのだろうか、ということに私は関心を持った。

不思議な生き物:「わぁ！」

その声がした時、その不思議な生き物は足を滑らせてしまい、その穴に落ちてしまった。その不思議な生き物は、穴の中をクルクル回っている。奇妙なことに、その生き物は私に助けを求めてこなかった。私は、穴の中を覗き込むようにして、その生き物が自力でどこまで這い上がって来れるかを観

察していた。不思議な生き物は土をかき分けながら、なんとか足場を作ろうとしており、自力で脱出することも不可能ではないように思えた。ただしそれは少し時間がかかるだろうと思われた。

私は一時間ほど放置しようと思って、先ほどと同様に、友達たちとサッカーをすることにした。白いモコモコとした毛に覆われた小さな不思議な生き物が、穴の中で一生懸命に外に脱出しようとする姿がいつまでも瞼に焼き付いていた。フローニンゲン:2019/1/1(火)08:17

No.1534: A Waltz at Twilight

It is 4PM now. I can see a beautiful mackerel sky that is lit up by the setting sun. A vapor trail above the sky looks as if it rode on a back of a dragon.　Groningen, 16:21, Wednesday, 1/2/2019

3615. ジョージ・スペンサー＝ブラウンの言葉より

時刻は午後の二時を迎えた。つい先ほど、いつものように仮眠を取り終え、これから午後の活動に入っていく。元旦が充実した形で過ぎていく。早朝に降っていた小雨は午前中の早い段階で止み、今も晴れ間が顔を覗かせている。起床直後の願いが通じたのだろうか、幸いにも、午前中に初日の出を拝むことができた。

今、雲のない空に冬のやわらかな太陽が浮かんでおり、それは優しい日差しを地上に届けている。その光を浴びながら、午後からの活動に励みたい。

大晦日の昨日と同様に、今日もケン・ウィルバーの書籍の監訳の仕事を進めていた。本日は、分量のある第三章のレビューに取り掛かっており、午前中から昼にかけて集中して取り組んでいたおかげもあり、ほとんどのレビューを終えた。午後に一、二時間程度時間を取れば、第三章のレビューを無事に終えることができるだろう。すべてが順調に、そして着実に進行していく。

監訳中に、書籍の中で引用されている、イギリスの数学者ジョージ・スペンサー＝ブラウンの言葉に目が止まった。「新たな発見は、知る必要のあることを心に留めておくと必ずやってくる。関心を持った問題を絶えず心の中に抱き続けていれば、いつか問題のほうが降参して、その問題が解決する」というような意味を持つ言葉だった。この言葉を読んだ時、まさに自分が毎日日記を書いているの

はそのためだったのだと思わされた。日々自己や自己を取り巻く現象をより深く知ろうとする意思が自分の中にあり、何を知る必要があるのかを絶えず心に留めておくために、日々日記を書いている。

そして、解決を望む課題に対しても、それを日記として文章の形にしておくことで、それは絶えず心のどこかに格納され続けており、いつか問題の方が降参して、その課題が自ずから解決されていく、という現象を頻繁に体験している。書くことは対象を心に留めておくことであり、それは新たな知の発見や、課題の自発的な解決を生み出す。そのようなことを改めて思わせてくれた。

午後二時半を迎えようとしているフローニンゲンの太陽は、もう夕方であるかのような淡い光を発している。先ほどまでは雲がなかったのだが、ちょうど今は街の上空に雨雲が姿を現し、小雨を降らせている。

今日はこれから、少しばかり過去の日記を編集し、その後、ハイドンに範を求めて作曲実践をしたい。作曲実践が終われば、再び監訳の仕事を行う。おそらくそれは夕食前か夕食後すぐに終わるであろうから、就寝までの時間は再び作曲実践をしたり、ゴッホの手紙を読み進めたい。フローニンゲン:2019/1/1(火)14:26

3616. 懸命に生きてきたこと

2019年最初の日が終わりに近づいている。今日も本当に普段と全く変わらない過ごし方をした一日だった。一切特別なことはしておらず、逆に、特別なことをしない日々が毎日特別に思える。そんな感覚を持ちながら毎日を生きている。

昨夜は年越しの花火が派手に打ち上げられていたが、今夜はもう落ち着いている。とはいえ、先ほどまでは時折誰かが花火を上げていた。今夜は静かに眠りの世界の中に落ちていくことができるだろう。

夕方、窓際に近寄って外を眺めていたところ、向こう側の窓ガラスに一匹のアブが付着していることに気づいた。こちら側の窓ガラスをノックしてみても、びくともしない。そのため、私はそのアブの体

をじっくりと観察することにした。眺めれば眺めるほど、一匹のアブがとても愛らしい存在に思えてきた。

進化の過程において、このような生命が誕生したことが本当に奇跡のように思える。そして、自分のような人類が生まれたということには本当に驚く。アブの手先には白い吸盤のようなものがあって、それが窓にピタリとひっつく秘訣のようだった。

先ほど、本日最後の作曲実践を終えた。曲を作っている最中に、なぜだか文章の執筆に関することを考えている自分がいた。

自分が大切だと思ったこと、重要だと思ったこと、面白いと思ったことは、全て文章として書き残しておく。文章の形になろうとしたものは残さず全て言葉として書き残しておく。そうしなければ、新たなものは何も見い出せず、新たなものは何も開かれてこない。もうそれを知ってしまっている自分がいることについて思いを馳せていた。

この一年のみならず、欧州で過ごすこの三年の間、自分はどんな時にも、どんな場所でも文章を書いてきた。いついかなる時も、自分とこの世界の双方に向き合って文章を書いてきたこと。それが自分を根底から支えるものになっている。

この三年間において、この世界に対して何か意味のあることを自分はしたのだろうか。答えは否だろう。そのようなことは一切していない。ただ、一人の人間として懸命に生きてきたという事実だけがそこにある。私たちはそれ以外に何かをなす必要があるのだろうか。それ以外のことは、小さな自己から生まれた偽善的なものに過ぎないのではないだろうか。一つの生を懸命に生きることは、それだけで尊い何かをを含んでいるのではないだろうか。

自分にできることは本当に少ない。日々をただ懸命に生きること。その証として日記を書き、作曲をすること。自分にできるのはそれだけのように思えてくる。明日もこの一年も、これからの人生も、この世界のいかなる場所でいかなる状況に置かれていたとしても、私は日記を絶えず書き、絶えず曲を作って毎日を懸命に生きて行く。フローニンゲン：2019/1/1（火）21:29

3617. 新年二日目の朝に思うこと

今朝は六時半に起床し、七時から一日の活動を始めた。幸いにも、昨夜はもう花火や爆竹の音が聞こえることはほとんどなく――誰かがまだ少しだけ花火や爆竹を鳴らしていたが――、すぐに深い眠りの世界へと落ちていくことになった。快眠を取ることができ、今日も一日の活動に向けて気力に満ち溢れている。

昨夜就寝前に改めて考えていたことは、日本語でこのようにして日記を書くように、自由自在に曲を作りたいということだった。そのためには学習と実践が欠かせない。絶え間ない学習と実践。それを2019年も自分に課そう。いや、そのようなことを考えることはもはや必要ないかもしれない。絶え間ない学習と実践が自分の人生になっているのだから。そのようなことを昨夜考えていた。

今日も作曲に関する学習と実践を行っていく。私は本当に、日本語で文章を書くのと同じぐらいに自由自在に曲を作りたいと強く思っているようだ。その思いはとても強い。

昨日、自分が作った曲を聴きながら、そこから喚起される感覚を絵として表現していた。この実践は、毎回曲を作る時に必ず行っているものである。水筆ペンを購入して以降は、色鉛筆で絵を描いた後、ペンを用いて水を含ませることが習慣になっている。単に色鉛筆で描くだけよりも、水筆ペンを活用した方がより味わいのある絵になっていくように思う。

昨日、何気なく二つの色を選び、それを水筆ペンで混ぜてみたところ、色の組み合わせが悪かったのか、曲が喚起する感覚とは異なり、随分と汚れた色が生まれた。そこから得た素朴な気づきは、混ぜてしまうと汚くなってしまう色があるのと同じように、混ぜてしまうと汚く響く音がある、というものだった。

作曲においては、どのような音を組み合わせてハーモニーを生み出すかは一つ重要な要素であり、綺麗に響く音の組み合わせをこれからも研究していこうと思う。ここでさらに思うのは、綺麗に響く音の組み合わせを見つけるためには、逆に、汚く響く音の組み合わせについても習熟している必要があるということだ。どのような条件下でいかなる音を組み合わせると汚く響くのかに習熟していれば、まずは汚い響きを避けることができる。より応用的には、あえてそうした汚い響きが必要になる曲の中でそれらを有効に活用していく足がかりになるだろう。

そこから今度は、綺麗に響く音の組み合わせをより探究していくことによって、綺麗な響き・汚い響きの双方をうまく曲中の中で表現できるようになってくる。一つ一つの音の響きは、ある意味、一つの色に喩えられるため、活用出来る色の引き出しをできるだけ増やしていくように心がけたいと思う。

今日の早朝の作曲実践から、そうした意識を強く持ちたい。早朝の作曲実践では、バッハのコラールを参考にする。今朝のこの瞬間の感覚として、あまりきわどい音（汚く響く音）を活用したいと思わないため、ディミニッシュコードを活用することはないと思われるが、何か新しいことを試したい。あるいは、ここ最近試していることの技術をさらに磨くような実践の場としたい。

当面の間は、セカンダリー・ドミナント、置換ドミナント、サブドミナント・マイナー、sus4の技術に習熟しようと思う。その中でも優先順位としては、少しばかり浮遊感や神聖な感じを表現するために、sus4を短調の曲で積極的に活用してみようと思う。フローニンゲン：2019/1/2（水）07:28

No.1535: The Graceful End of a Day

A day in my life is approaching the end today, too. I'll go to bed, wishing tomorrow to be also fruitful. Groningen, 21:43, Wednesday, 1/2/2019

3618. 会議室に身を潜める夢

今しがた、一日分のコーヒーを作り始めた。今日はまだ今朝方の夢について振り返っていなかったため、コーヒーを作っている間に夢を振り返っておきたいと思う。

夢の中で私は、暗い会議室のような場所にいた。どうも雰囲気として、それは日本ではなく、アメリカのどこかの都市にあるビルの中の会議室のようだった。会議室には誰も人がいなかったのだが、突然、鍛えられた肉体を持つアメリカ人の男性が私の目の前に現れた。どうやら私たち二人は、何かのミッションを遂行するためにこのビルに潜入し、今はビルの中の会議室に身を潜めているようだった。

相棒のアメリカ人男性：「ヨウヘイ、伏せろ。誰か来るぞ！」

そのように相棒のアメリカ人男性が述べると、牛乳パックほどの大きさの白いマシーンが地面を徘徊していた。どうやらそれは建物の侵入者を探しているらしかった。

アメリカ人の相棒と私は、テーブルの下に身を潜めており、その不思議なマシーンが通り過ぎていくのを待っていた。すると、そのマシーンは、会議室のスクリーンに一つの映像を映し出した。それは、二人の欧米人が、荒れ果てた大地の上で決闘しており、一人の人物が降参の言葉を述べて地面にうずくまっている映像だった。地面にうずくまっている男性を見て、もう一人の男性はさらに果敢に攻撃しようとしている。

その人物は地面にうずくまる男性の上に乗っかり、男性の胸ポケットにあった小型ナイフを奪った。そして、そのナイフで地面にうずくまる男性の目玉をくり抜いた。目玉をくり抜かれた人物は身動きすることを止め、もう一人の人物はくり抜かれた後の目の中を覗き込んでいた。どうやら、それら二人の人物は人間ではなく、人間そっくりのロボットのようだった。二体のロボットの決闘場面を私たちに見せたマシーンは、青白く光る光を発しながら、会議室から消えていった。

相棒のアメリカ人男性:「危なかったぜ。もう少しで見つかるところだった・・・。また誰か来たぞ、伏せろ！」

次に会議室に入ってきたのは、人間の赤ちゃんだった。欧米人の赤ちゃんが会議室にハイハイをしながら入ってきたのである。私たちのテーブルのすぐそばまで赤ちゃんがハイハイで迫ってきた。私たちは、赤ちゃんに姿を見られてしまうと恐れた。

赤ちゃんがもう私たちが身を潜めるテーブルのすぐそこまで来た瞬間に、突然大きな声で泣き始めた。その泣き声を聞いて、赤ちゃんの母親が会議室に駆けつけた。母親は赤ちゃんを素早く抱きかかえ、赤ちゃんをなだめながら会議室から出て行った。

相棒のアメリカ人男性:「いや～、本当に危なかった。危うく見つかるかと思ったぜ」

相棒のアメリカ人がそのように述べたとき、私たちはもう身を潜める必要はないことを確信した。会議室から出ようとしたところで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/1/2(水)07:49

No.1536: A Torrent

I'm invigorated by the fine wether. I'll start today's work in a while. Groningen, 09:41, Thursday, 1/3/2019

3619. ユダヤ人の抑圧史・黄色い桜・日本料理屋に関する夢

時刻は午前八時を迎えようとしている。例年に比べて、今年のフローニンゲンは比較的暖かい。確かに寒さを感じさせる日もあるが、そうだとしても、例年遭遇するフローニンゲンの真の寒さとはほど遠いように感じている。天気予報を見ると、新年の第一週に関しては引き続き同じような気温になるようだ。

ちょうど先ほど、一日分のコーヒーが出来上がった。今朝方見ていた夢の続きを書き留めた後に、今日の活動を本格的に始めたい。今朝方見ていた最後の夢の場面について今少し思い出している。

夢の中で私は、小さなセミナールームにいた。私はそこであるセミナーを行っていた。現アメリカ大統領の政治思想を主に取り上げたセミナーの中で、私はユダヤ人の抑圧の歴史に関する話をした。以前に、それを伝えるのに適切な動画を見つけており、それをセミナーの中で流した。そのセミナーに参加していたのは、二人のアメリカ人の中年女性だけだった。

彼女たちは、その動画を見た後に、何か驚きと納得が混じった表情を浮かべていた。参加者の一人の女性が、「これでようやくわかったわ。うちの母はユダヤ人で、母も抑圧されていたのよ。そこでの体験が今の私に影響を与えていたんだわ」と述べた。もう一人の女性も同様のことを述べた。

実は私は、彼女たちがそのようなコメントをすることを最初から予想していた。いや、そうしたコメントが出てくることを期待して、その動画を流したのであった。動画を見終え、二人の感想を聞いた後に、私たちは隣の部屋に移った。そこには、地球上のどこかの地域を忠実に再現した模型があった。その模型は巨大であり、ガラス張りのケースの中に入っていた。模型に近寄り、三人でそれを眺めていると、突然、模型上の大地が水に侵食され始めた。みるみるうちに水位が上がっていき、大地は瞬く間に水の下に沈んでしまった。だが、三人ともその様子を冷静に眺めていた。

模型のある部屋から離れようとした瞬間に、私は小中学校を過ごした社宅の中にいた。厳密には父の部屋の中にいて、パソコンを立ち上げてメールを確認していた。すると、一人の日本人男性から一通のメールが届いていた。その方の年齢は60歳ぐらいだということが、メールの日本語の質感からなんとなくわかった。メールを見ると、先ほどセミナーで流していた動画を購入したいという内容だった。

実際には、すでにその男性は私の銀行口座に515円を振り込み、すでに動画を購入済みであり、動画をどのように受け取ることができるのかを尋ねてきたのである。私は動画を販売した記憶はなく、少し不思議に思っていた。

すると、パソコンと向き合っている私の元に愛犬が駆け寄ってきた。愛犬は私と遊びたがっているようであり、どこか興奮気味だ。遠くの方から、母が「激しく走っちゃダメよ」と愛犬に向かって述べた。私は愛犬が激しく家の中を走る姿を見るのが好きであったため、掛け声とジェスチャー交えながら、愛犬をより興奮させようとした。

すると見事に、愛犬は廊下を何度も行ったり来たりと激しく走り出した。私はその様子を笑いながら眺めており、しばらく廊下を何度も行ったり来たりした愛犬は、再び私の元にやってきた。今度は少し冷静になっており、父の部屋に置かれた物を次から次に飛び移っていき、私の顔の高さまで愛犬がやってきた。私がパソコンをじっと眺めているのと同じように、愛犬もどこか真剣な表情をして、じっとパソコンを眺めている。そこで私は愛犬を抱き抱え、再び遊ぶことにした。

すると、私はあるマンションの入り口の真ん前にいた。そこはどうやら日本のようだった。雰囲気としては実家のマンションに似ている。私は、マンションの駐車場に面した裏手の入り口から中に入ろうとした。すると、二人の若い夫婦に出会った。二人は私に挨拶をし、「いや〜、黄色い桜が見たかったんですけどね。今日はちょっと用事があって無理なんです。また次回お願いします」と私に述べた。なぜだか私は、七階の自宅のバルコニーに突如咲き始めた黄色い桜をマンションの住人たちと堪能する企画を練っており、数日前にそれを告知するチラシを配っていたようだった。

二人が来れないのは残念であったが、また機会があれば二人を誘いたいと私は思った。すると私は、自宅のマンション近くの日本料理屋の前にいた。特にご飯を食べたかったわけではなく、その

料理屋で働くマンションの住人にチラシを渡しに来たようだった。その料理屋はとてもお洒落な雰囲気を持っていて、和の感じが見事に醸し出されている。

料理屋の中に入って、私はマンションの知り合いを見つけようとしたが、なかなか見つけることができなかった。座敷を歩いている時に、どういうわけか、テーブルに置かれていた熱いうどんの中に自分の足を突っ込んでしまい、その時は素足だったため、危うく火傷しそうになった。

結局マンションの知り合いを見つけることができなかった私は、料理屋を後にすることにした。入り口を出ると、この料理屋を取り囲むようにして流れている綺麗な小川に目が止まった。しばらく小川を眺め、近道のためにその小川をジャンプして向こうの道路に行こうかと思ったが、小川に落ちてしまっては元も子もないので、きちんと入り口の通路から出て行くことにした。すると、そこで四、五人ぐらいの欧米人の家族とすれ違い、彼らはこれからこの料理屋で食事をするようだった。

料理屋の前には、信号機のない歩行者用の横断歩道があり、そこを通って自宅のマンションに戻ろうとした。すると、私の目の前を二台の乗用車が通り過ぎていった。二台の車が通り過ぎていった後に、右から他に車がやってこないことを確認して横断歩道を渡った。そこで夢から覚めた。フローニンゲン：2019/1/2（水）08:22

No.1537: From a Rift in the Light Purple Clouds

The sky above Groningen in the evening looks light purple, which creates a mysterious atmosphere. Groningen, 16:54, Thursday, 1/3/2019

3620. たくましい知性とゴッホの手紙より

時刻は午後の二時半に近づきつつある。今日のフローニンゲンの天気は申し分ない。昼食前に近所のスーパーに買い物に出かけた時、冬の穏やかな太陽の光を全身に浴びることができて大変心地よかった。今もまだ太陽の光が街に降り注いでいる。もう二時間ほど太陽の光を見ることができるだろう。

いつものことであるが、この地の生活において、絶えず一人で書斎にこもって活動をしていると、雑多なことを考えるものである。今朝方は、この時代を生き抜いていく知性を育むことの難しさについ

て考えていた。自己と共同体を取り巻く物語に自覚的になることの難しさ。そしてその必要性。それら二つをどのように伝えたとしても、物語に無自覚な人たちには伝わりづらい。

自己と共同体を呪縛する物語に気づくことができるたくましい知性を獲得することが難しいのは、単純にその鍛錬の方法や量というよりも、実存的な問題なのかもしれない。どういうことかというと、ひとたび自己と共同体を呪縛する物語に自覚的になった瞬間に、私たちは既存の自己、所属する共同体（物理的・精神的な共同体）、さらには物語そのものから脱却せざるをえなくなる。つまり、自己と共同体を取り巻く物語に自覚的になれた瞬間に、それに自覚的になった自己は、上記の三つの事物から外にはじき出されるのである。それは実存的な危機を引き起こすようなものになりうるように思えてくる。

昨夜、すべての仕事が終わり、ゴッホの手紙を少しばかり読み進めていた。今読み進めているのは、ゴッホが画家になる決意をする前の段階、言い換えると、画家ではなく神父になるための勉強をしていた段階のゴッホが書き残した手紙である。ゴッホが述べていた一つの言葉に目が止まった。

「すべての音が消えたとき、自己を超えた者の声が聞こえるだろう」

ゴッホはそのような言葉を手紙にしたため、弟のテオに送っている。この現代社会には、本当に様々な種類の雑音が溢れているように思える。そうした雑音に耳を傾けている限り、自己の内側の真実の声、さらにはゴッホが述べるように、自己を超えた者の声など聞こえてこないだろう。現代人は雑音にまみれ、大切な声を聞き取ることができていない。そのようなことを昨夜考えていた。

今日はこれから、ショパンのワルツに範を求めて作曲実践をしたい。そのあとに、ウィルバーの書籍の監訳の仕事を再開させる。今から行う作曲実践では、少しばかり明るい曲を作りたい。物理的・精神的に過酷な冬の中で、そうした環境が喚起する感覚だけを曲にしていくと、文字どおり気が滅入ってしまうだろう。

今後行う作曲実践では、物理的・精神的な環境状況とは相反するものを意図的に作ることも行なっていきたい。今この瞬間の私は、自分が作る明るい曲に明るいエネルギーを注入して欲しいような気持ちを持っている。フローニンゲン：2019/1/2（水）14:37

© YOHEI KATO 2019